

ラオスの こども通信

69号
2017年5月発行

発行：(認定)特定非営利活動法人 ラオスのこども

- 「ラオスのこども」、活動35年 ▶ p.1
- はじめる・つながる・つくりだす [2017.1-2017.4] ▶ p.2-P.3
- 「ラオスのこども」の仲間たち ▶ p.4
- メコンのほとり「頂」 ▶ p.4



*写真の説明はp.4をご覧ください。

「ラオスのこども」、活動35年

ラオス3,000校で、子どもたち、先生と本をつないできた。今も、7,000校以上に本がない。

ラオスの子どもたちの成長を、支援くださる皆様とともに願い、「ラオスのこども」(ラオスでは「ALC」と呼んでいます)は1982年から本・紙芝居の出版、配付、学校・地域での図書室の設置・運営支援、そして教員研修などを通じた読書習慣の普及などに取り組んできました。これまでの35年の歩みを踏まえ、代表のチャンタソン、ヴィエンチャン事務所所長のスラピー、スタッフのバンロップが野口事務局長の進行で語りました。

子どもたちに、ラオス語の本を読んでもらいたかったから

野口：代表はどのような思いで活動を始めたのですか？

チャンタソン：私は、若いころ日本の大学に留学する機会をいただきました。卒業後は日本で働く場を得て、結婚もしました。そして、ラオスに一時帰国して公立の学校を訪ねたとき、教科書はじめ本が全くないということにあらためて大きな驚きをおぼえました。

そこで、ラオスの子どもたちに絵本やおもちゃを送る活動を始めました。また、日本の絵本作家のみなさんに協力いただき、ラオスで「絵本作家養成セミナー」を開催しました。初めは、ラオス作家協会に協力を打診しましたが、いい返事してもらえなかったのです。小学校や幼稚園の先生たちに参加を呼びかけ、開催しました。

このセミナーを通して、12冊の絵本を出版することができました。どうしても、子どもたちにラオス語で作られた本を届けたかったのです。



チャンタソン インタヴォン
代表。1982年に「ラオスの子供に絵本を送る会」として活動を開始



野口：35年間の実績を簡単に紹介してください。

スラピー：3つお話します。1つ目は本の出版です。新しい多様な作品を出すとともに、子どもたちにどんな本が人気なのかを貸出記録や本の傷み具合から把握して、それらの再販にも力を入れています。これまで、紙芝居も含めて216タイトル、約90万冊出版しています。

2つ目は出版した本の配付と学校図書室の設置支援です。ラオスには約1万500の公立小中高校があります。およそ3割にあたる3,000校に図書セットを届けました。また、設置支援した学校図書室の数は300を超えました。

3つ目は、図書室の設置や運営支援の一環で行っている先生などに向けた研修です。以前は複数の学校の図書室担当の先生に集まってもらって開いていました。現在はスタッフが学校を訪ねて、より丁寧な研修をしています。そして、図書委員と呼ばれる生徒たちの研修も行っています。



スラピー ヴィラヴォン
ヴィエンチャン事務所所長。2006年入職、2011年から現職

野口:バンロップは子どもたちの人気ものですね。ALCのスタッフになろうと思ったのは、なぜですか?

バンロップ:子どもの頃、メコン川沿いで拾い集めたペットボトルを売って家計の足しにしなければならぬほど貧しい生活をしていました。中学生の時、自宅近くにあったALC事務所に併設された図書室で本と出会いました。とくに読み聞かせが楽しくて、通うようになりました。大学では地域開発を学び、卒業後は広告代理店で働きました。偶然にもALCが関係したイベントの企画をしたこともあります。その後、新聞でALCの職員募集を知り、地域が発展するうえで本はとて大切と考えて、応募しました。幸い採用されて、今に至っています。



バンロップ オンブーヴィライ
2013年入職。図書室の設立支援、図書の販売を担当

図書室を開設した後のフォロー、応援こそ大事

野口:ラオスの学校現場を最も多く見てきているのはALCにおいて他にないのでは。子どもたちの読書環境を良くするのに、何が大切ですか?

スラピー:図書室を設置した後のフォローが課題です。図書室を担当する先生が異動になり、図書委員の生徒たちも変わります。さらに郡や県の教育局の担当者が学校図書室についてよく理解していないため、先生たちのやる気が削がれることも見受けられます。定期的に学校を訪ねてサポートして、図書室が使われ続ける状態を保つことが大事です。

野口:代表は「ラオスのこども」として、どのように支援していこうと考えていますか?

チャンタソン:まだまだ本が足りないと感じています。先生たちには、図書室を、本をもっと活用するアイデアをもって欲しい。小学校なら読み聞かせを、中高生には図書室で「調べ学習」とか。「ラオスのこども」として、もっと多くの本を届けながら、先生の研修に力を入れ、子どもたちの可能性を広げるお手伝いをしていきたいと思えます。

野口:35年間でラオスの子どもたちをとりまく読書環境は改善して



野口朝夫
事務局長。1992年運営参加、2003年現職

てきたと思います。「子どもたちの可能性を広げるお手伝い」を着実に進めるため、「ラオスのこども」は「マンスリーサポーター制度」を開始しました。これは、今なお困難を経験している子どもたちを継続的にサポートする仕組みです。より多くの方々のご協力をいただき、「ラオスのこども」は、子どもたちの成長を願いつつ、彼らの可能性を広げるお手伝いを継続したいと思えます。

「マンスリーサポーター」がスタートします

マンスリーサポーターは、毎月一定額の寄付を通じて「ラオスのこども」の活動を支援くださる方々です。1,000円単位でお決めいただいた定額寄付金を、その方の指定の銀行またはクレジットカードの口座から自動引き落としが可能です。マンスリーサポーターの寄付は税額控除・寄付金控除の対象になります。

ぜひ、お友だちやお知り合いにご紹介ください。必要な部数のパンフレットをお送りしますので事務局(alctk@deknoylao.net 03-3755-1603)までご連絡ください。お友だちやお知り合いに事務局から直接資料を送ることも可能ですので、ご相談ください。

ホームページからも申込みいただけます。

<http://deknoylara.net>

学校図書室を5校で開設

空き教室を利用した学校図書室は、今期(2016年7月～2017年3月)は4都県の小学校3校と中等学校2校で開設し、あわせて先生への研修を行いました。

図書室開設学校名とご支援者名

- カムワン県マハサイ郡パーナム中学校<1月6～7日>
福岡那の香ライオンズクラブ
- ヴィエンチャン都サイセター郡ナークワイ中学校<1月9～10日>
沖電気工業株式会社OKI愛の募金
- サラワン県サラワン郡カンタナラート小学校 1月9～10日
千葉港ロータリークラブ
- サラワン県サラワン郡ボンケオ小学校 1月11～12日
千葉港ロータリークラブ
- ポリカムサイ県ポリカン郡パーシン小学校 2月9～10日
ラオスの子どもとつながる会(大河原キミ子)

小学校は約400冊、中等学校は約600冊の本を設置しました。図書室開設式には、生徒、教員に加え地域住民の代表にも参加してもらい、地域でも利用してもらうよう働きかけます。公共図書館などが無いこれらの地域では、開設した学校図書室以外で、本を利用できる場所がありません。

開設式の後は、図書室担当の教員を対象に図書室の運営・管理方法について研修を行います。多くの先生はこれまで図書室を利用した経験がないので、有効に利用されるように、トレーニングする必要があります。

また、図書室の運営が安定して続いていくように、子どもたちによる「図書ボランティア」で、運営をサポートしてもらいます。「図書ボランティア」は日本の図書委員会と同じような役割ですが、活動に興味をもって参加したい人が集まるため、クラブ活動のようです。



図書ボランティアになった中学生に聞いてみたところ、「みんなのために仕事をするのが楽しい」「いろいろな本があることがわかって、もっと本が好きになった」「本を題材にした劇をつくる活動が大好き」と楽しみながら活動している様子が伺えます。

ラオスの多くの地域では、本屋も図書館もなく、家に本が置かれていることもありません。学校図書室が生活の中で唯一、本と接することができる場です。本を読むことで、自分に必要なことを理解したり判断したり、自己表現ができるようになり、その入口となるのが、学校図書室なのです。(赤井朱子/東京事務所)

村の図書室を育てていこう

ほとんどの学校に図書室がなく、書店は首都にもほとんどないラオスで、農村部で地域を巻き込んだ読書活動を定着させようと、地域文庫を開設するプロジェクトが進行中です。

「今まで教科書以外の本は見たことがないよ」という大半の村の人たちにとってはもちろん、おもに学校の図書室を手がけてきた当会にとっても、初めての経験ばかり。お互いに試行錯誤しながら進めてきた、チャレンジな事業です。

学校がお休みのときでも子どもが本を読めるように、保護者や地域の人々が読書に親しみ、子どもの読書に理解を示してもらえるように、学校図書室の分室として地域文庫を開設してきました。準備の整った地域から順次開設し、2017年3月、最後の3地域で開設を完了しました。



本の内容が気になって、作業はときどき一休み。
(ヴィエンチャン県ファン郡ナブーン村地域文庫)

開設したら、そこからが本当のスタートです。地域文庫を運営していくのは村の図書ボランティアの皆さんで、農作業や家事のかたわら文庫を開放しています。

学校に図書室がない子どもたちが地域文庫に本を借りにきたり、お母さんたちが料理本を見て今まで作ったことのない料理に挑戦したりと、うれしい変化が起きています。

一方で、貸出手続きなしで貸出している、利用者数を記録していない、記録のしかたが間違っているなどで、利用状況がつかみづらい文庫もあります。農作業などが忙しくて文庫が開けないところもありました。課題は山積みです。スタッフが図書室運営マニュアルを見せながら繰り返し指導し、粘り強く図書ボランティアの皆さんと話し合いを重ねることで、図書ボランティアの皆さんは図書室の運営方法を習得し、自信をつけつつあります。

プロジェクトの最終年を迎え、私たちの手を離れて村の人々が自分たちで運営していくための活動に力を注いでいます。2017年3～5月、それぞれの地域文庫が、今後の運営について考え、具体的な実行計画を立てるワークショップを行いました。村長、地域文庫の図書ボランティアが、当会スタッフと県・郡の教育局のスタッフのサポートを受けながら、意見を出し合い、各地域文庫が活動計画と予算計画の案を作りました。

まだまだよちよち歩きの地域文庫。独り立ちできるように、引き続き皆様のご声援をよろしくお願い致します。

※この事業はJICA 草の根技術協力の一環として実施しています。
(政岡史織/ラオス駐在スタッフ)

なんと35回目! ピーマイ・パーティー

4月22日(土)大田区池上会館で、ラオスのお正月を祝う「ピーマイ・パーティー2017」を開催しました。「ピーマイ」とはラオス語で「新年」を意味します。ラオスをはじめ、タイやカンボジアでは4月に新年を祝います。

「ラオスのこども」が主催するピーマイ・パーティーは、今回でなんと35回目! ラオス「初体験」の方、旅行をして好きになったという方、おなじみの方など100人以上が参加。新年の伝統儀式「パーシー」で幕を開け、現地で使うスパイスが入った本格ラオス料理のビュッフェ、ラオス音楽をバックに全員で同じステップを踏むダンス「パーサロップ」など、五感でラオスを体感しました。

アンケートでは、「ラオス料理がとてもおいしかったです!また参加したいと思いました」「インターンの学生さんが活躍していて、好感が持てました」などの感想をいただきました。「ラオスのこども」のピーマイ・パーティーは、事前の準備から当日の運営まで、インターンの学生、ラオスからの留学生やボランティアがつくりあげています。

来年は、ラオスをさらに深く味わい体感できる新企画を用意して、多くの方の来場をお待ちします。パーティーの収益はラオスの子どもたちへの支援に大切に役立てます。

協賛: 木徳神糧株式会社、すかいらくグループ、東京アライドコーヒーロースターズ株式会社(五十音順)



パーシー式が始まると、まず留学生たちが周りに座りました。様子見だった日本の人たちはだんだん集まって、大きな輪になっていきます。

「ラオスのこども」の仲間たち

多彩な世代からの刺激、思いがけない「収穫」です。

福島孝好さん/ボランティア(おにも会計)

会社勤めのころからラオスの若者と縁があり、退職後、ラオス関係の団体でボランティアをしたいと思い、いくつか候補がありました。

「ラオスのこども」の報告会に行ってみて、織物や図書袋(布製の状差し状の簡易書棚。本を入れ畳んで背負える)を見て、おもしろいと思ったのと、気持ちよく活動に参加できそうだと感じ、決めました。その選択は正解でした。2005年のことです。自分に何ができるかわからず、いろいろやって、現役時代は金融関係の仕事に携わっていたので、会計を手伝うことになりました。

認定NPOという、寄付者に税金が還付される制度があります。会が認定されるための書類づくりは大変でしたがやりがいがありました。寄付をする人、ラオスの子どもたち、そして会、みんなにとっていい制度です。この制度は更新の書類作成が、これまた大変なのは後でわかりました。

NPOを外から見ているところは、正直なところ会計処理の信頼性には若干の不安もありました。よその団体は知りませんが、こちらの会は、よくぞここまでと思うほどとてもきちんとしていて、驚き



会の仲間との山歩き会の隊長もやっています(大菩薩嶺にて)

表紙の写真

ラオスのピーマイは水を掛け合ってお祝いをします。通りすがりのだれもかれも容赦なく。子どもたちは大きな水鉄砲を抱え、水風船で戦闘態勢。と思ったら、真っ赤な子猿になっていました。顔を赤くした(お酒で)大人たちの真似っこなの？ ポシー村の新年です。

特定非営利活動法人ラオスのこども

組織の理念「ラオスのこども」は、公正で平和な社会づくりに貢献することを目的として、子どもたちが自らの力を伸ばし、人生を主体的に選択できるよう、日本とラオスの人々が協働しながら、読書に親しむ環境をつくります。

ラオスのこども通信 69号

2017年5月発行 編集人: 森 透

発行: Action with Lao Children / Deknoylao

(認定) 特定非営利活動法人 ラオスのこども

〒143-0025 東京都大田区南馬込6-29-12 ミキハイツ303

TEL/FAX 03-3755-1603

e-mail: alctk@deknoylao.net

http://deknoylao.net

都営地下鉄浅草線 西馬込 南口下車 徒歩7分

郵便振替 00140-6-462494

ました。

ボランティアをしていて面白いのは、幅広い年代が集まることです。若い世代からとても刺激を受けます。思いがけない「収穫」です。もっともっといろいろな人が参加したらいいと思います。おすすめしますよ。

メコンのほとり頂

「いただきます」。ラオスの新年

川のせせらぎ、鳥のさえずり、蝉(チャッチャン)の鳴き声。

どこの家も、縦列2本の蛍光灯の下に、水を張った大きな洗面器が置いてある。

水に落ちたのは、ゲンゴロウ・羽蟻(メンマオ)・バッタ・興柎(チロ)・コガネムシ・蛾・螻蛄・カミキリムシ・カブトムシ、そしてチャッチャンも。どこの家も、朝一番の下ごしらえは、羽根を雀りしながら種類分けからはじまる。後ろで、ブヒーブヒーと抵抗している鳴き声。

チェオチロ(興柎のディップ)、ラーブチャッチャン(蝉の香草和え)が出来上がる。料理しなかったものは素揚げに。ハーブのレモングラスやバイマックル、唐辛子の素揚げを添えて食卓上がる。

川から獲ってきたばかりの魚。焼き魚にスープやコイパー(アリを入れた香草和え)になって、出来上がった料理とご近所さんの持ち寄りおかずも一緒に豪華な朝ご飯。ピンムー(豚の丸焼きならぬ開き)が焼きあがるころ宴会へとなだれこむ。

大人はビアラオ(ラオスのビール)と自家製酒を飲み交わし、歌ありの大盛り上がり、子どもたちは?(表紙の写真をご覧ください)

命を頂く「いただきます」を感じることでできる避暑地、ラオス北部のポシー村でのピーマイラオ。

横山真紀子さん/ラオス在住・保育士

